



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	演習
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1950
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77321
Type	manuscript
File Information	K001_0125.pdf





TOKODO

NOTE BOOK

演習

昭和二十五年度

鈴木

記

一、クワの語、洞壺ノミヤ

一、蘇行地洞壺

一、島ノ穴

世帯云

奥尻島。石室

百々方々にあります。厩戸ウラヤ(厩カ屋)

編綴外七字をなして八字

編綴字は四角に作る。

万回

三千年

ニシンの産地は三十一歳より皆なり。

十七年以降より不漁。捕獲量は十八

年の十を越えぬ。而して五

人口記録

ニシンの漁獲量は。和りずは他にないか。

昭和十一年。八十八町あり

現在。六万五千町あり。

ニシンの記録は二十一年。五十二町あり。一

昭和十一年。五十二町あり。

山林は如何

漁獲の記録

ナカキウノ人ロ

十九年 万七十一戸 本村 三万五千七百人

秋田民四万八千二百人

他國の同五戸三十一より四十千まで
他に移住

出稼人の割合

十九年 ^{廿二戸} 廿二戸 一五六六

一七二八

十九年 ~~廿二戸~~ 廿四三ノ 廿四三ノ

イカハ十九年より

十九年 廿四三ノ ^ハ 廿四三ノ ^ハ 廿四三ノ

大乙十九年よりイカハに成力

昭和十九年よりイカハ大漢政村
昭和十九年よりイカハ大漢政村
昭和十九年よりイカハ大漢政村

昭和十九年よりイカハ大漢政村

才三回 奥底の道場園

部甚内婚 所場の似向

婚出は近くの婚のは遠くより。

一棟
十江ノ八戸五軒若尾
市街地層ノ一

四 出見和之國

五 友子園作

六 氏子園作

七 研書所我妻守 (研書所) 一ノ五ノ

八 保家白治亭 伍長五全一棟一人

九 青年園

一〇 婦女會

一一 研書所我妻守

一二 研書所

一三 研書所

4 研書所 入金れ五ノ月止上ノ小ノ此記あり。

五 研書所 入金れ五ノ月止上ノ小ノ此記あり。

六 研書所 入金れ五ノ月止上ノ小ノ此記あり。

七 研書所 入金れ五ノ月止上ノ小ノ此記あり。

八 研書所 入金れ五ノ月止上ノ小ノ此記あり。

九 研書所 入金れ五ノ月止上ノ小ノ此記あり。

一〇 研書所 入金れ五ノ月止上ノ小ノ此記あり。

一一 研書所 入金れ五ノ月止上ノ小ノ此記あり。

一二 研書所 入金れ五ノ月止上ノ小ノ此記あり。

一三 研書所 入金れ五ノ月止上ノ小ノ此記あり。

功娘は是等御是る。

今貴は宗祇村より二十五、相身十、
此等此福の事は名を父、親と同類。

代目付利子

親を利子、諸君使は料

無礼者代

その収入あり、
此等此福の事は名を父、親と同類。

此等此福の事は名を父、親と同類。

此等此福の事は名を父、親と同類。

此等此福の事は名を父、親と同類。

此等此福の事は名を父、親と同類。

此等此福の事は名を父、親と同類。

此等此福の事は名を父、親と同類。

此等此福の事は名を父、親と同類。

此等此福の事は名を父、親と同類。

1-9

全道

65.9%

100 50 10 1
1 1 1
499 99 49 9
二五〇七

五三八
三一〇
四五〇
一〇三

1000 500 100 50 10 1
1 1 1 1 1
999 499 99 49 9
八六七一七
一四五六
61.09%

一三五五
二七二八
四七七七
一四六二五
六五〇九

4 3 2 1
二四九 二五八 二九二 二七二
六一八 四六〇 三一四 一六八
三七八 三一四 二七三

1005010 /
1 1 1
99999 49 9

— 0 三 二

一五八
0
五
七

九
段
打

10 /
1 1
49 9

五 五

一
四
二
六

打
修
半

10 /
1 1
49 9
22
下
下
下

五 七

一
六
七
三
三

不
穿

10 /
1 1 1
99 49 9
22
下
下
下

三 二 二
二 二 一

一
五
四
四
六
九
一
二
一

当
子

二十六年 春 演習

一、調書 方 伍 牛 研 考

特 儿 子 研 考 伍

六、子 合 考 研 定 考

二、余 考 合 研 考

青
份
調
色
托

卷五

二瓶より全瓶に
サ摩エの
の批判の批判

267-
memorial, case work, case method
sampling method.

世
調
重
説
一
方
特
子
不
定
所
と
と
ケ
旨
不
ア
と
イ
ン
タ
ー
に
一
。
神
調
重
心
の
意
と
表
現
力
。
了
実
調
重
心
の
意
と
表
現
力
。
量
と
質
人
。
イ
ン
テ
ン
シ
ブ
一
。
一
。
一
。

一、
此
は
調
子
の
二
方
は

十卷 顧亭子 何陋齋

二ノノの野長とる道
二ノノの山

宋程子、
朱熹、
王陽明

余亦分鄉之民也

四 何人何に、
ハートナート
グリーター

五
芸
御
と
物
子
仙
鳴
代
々

晉陽記
丁巳新子

六子傷洞玄のれい返り手

之
 6
 1
 子
 信
 の
 巡
 行
 表
 記
 の

乃松
欒
型
平
地
型
不
包
含
型

一、一級によつて分類を推測する。

と云ふ之は眼目を見る。『甘利の刀』

の形の新形（中印紙成と指印）

一、調査項目

一、概略

一、調査の目的とスケール

一、ゲス

一、各種関係の調査

項目

一、生活実態調査、基本調査

と云ふこと

論文作成

昭和二十三年
秋、第二回

一、構成

一、同位時

一、方針、記号

一、論述(本論)

出典、引用等記

参考文献、資料の表

一、結論、結語、おすい

一、内容

序論の批判

序論の批判、批評、文化との関係

批判の視点、相関関係

改革の点と線

改革の方向

改革の方向、(家)

Community work school

Olsen, "School and
Community"

识

卷之四

一、示
二、特示
三、特示
四、特示
五、特示

卷之七

孝節の大佐の決之

古事記云何水の多き節に也
下女之行くを便ゆかしく

長短

文はよくなる。
 哲人の文、

文章の巧拙、名文を爲せり。

臨
來
語
之
書
之

[illegible]

同義統計字彙

一、表紙の折紙

一、學問の精神

あはれおろかなき事
瑞祥の中の一節

3
14
の
比
較

推定
の
お
か
ら

22

北海道民生生活実相調査書
 作新石の精査

(調査要領ありありに
 記す、)

第一節

ル、プレーカ、フランスの民の生活
 状態、を現示するに、その方々に
 何分、より、調査、を、なす、を、遂
 へ、その、生活、調査、を、なす、を、
 せ、し、し、し、し、し、し、し、し、
 中、央、大、学、に、お、き、て、し、し、し、
 フ、リ、で、又、地、方、の、し、し、し、
 市、場、と、し、し、し、し、し、し、し、
 の、よ、う、な、し、し、し、し、し、し、し、
 類型化する。

第二節

第二節、北海道、の、民、の、生、活、
 費、を、し、し、し、し、し、し、し、し、
 費、を、し、し、し、し、し、し、し、し、

消費その目的が、大抵海産物
安価に、多量消費するが、出産地
に、ついても、

第三部

絶、この消費その目的が、
効あり、それ故に、何
に利用するに、

消費、利用
及び利用

各機(一) 各機(二) 各機(三)

衣類、食料、住居、医療、教育、娯楽

交通、通信、公共

公共、交通、通信、公共

(中) 公共、交通、通信、公共

公共、交通、通信、公共

公共、交通、通信、公共

公共、交通、通信、公共

公共、交通、通信、公共

公共、交通、通信、公共

公共、交通、通信、公共

公共、交通、通信、公共

公共、交通、通信、公共

公共、交通、通信、公共

人の知能

公共、交通、通信、公共

陽居村 序文

村のセーフは有りさうな
 「五村は一つ」
 余の故郷の調子
 皆断片的、部分的
 打談な、あゝが死んで
 此の世の故郷
 又その記述
 統計の数字
 生活指導的
 陽居村の人の心
 村の人の心
 然り村そのものが
 是等の生活と
 陽居村の心

「我が村の自然」
 「我が村の歴史」
 「我が村の文化」

陽居村に同じ生活環境にある村人
 の持つくらし、生活の改善を
 都市の計画に、村の改善設計に
 健全な思想、精神、行動を
 おくし、しつとやら、作戦、立案、
 実行、
 行、文、流暢、活人、的、感、情、的
 著作、様、の中、に、あ、る、所、な、い、

暫くを調査
 「陽居村の文化施設」
 今後利用の調査

昭和二十五年 陽居村 陽居村 陽居村

行くべき道を、そして成長し行く
おのちの世を、打つた設計
である。
中雪をマニターとす、にうん、うん
アイの、同様の分折

峠を越え、生活。住居につま
の、は、こゝろ、人、か、と、い、ふ、
最低、を、い、は、こ、ん、な、し、
下、十、何、分、の、時、を、あ、か、
さ、す、は、は、あ、ま、の、な、な、な、
あ、か、の、人、々、に、立、ち、上、り、道、を、歩、く、
や、う、な、な、。

さう、の、後、け、や、同、様、の、書、に、詩、人
の、お、な、洞、室、的、観、念、を、あ、ら、わ、す、
ス、ト、ー、リ、ー、に、い、う、な、な、な、。

オントン

四年間は、そのうち城に住んで居る

家は、冬の間は、オントンの外へ

少しも苦にならなかつた。オントンは

近い所を、さういふしオントンの中は

春の初め、新しい家を建てた。あつた。

その城は、さういふ人の家は、まゝとし

て、その式に従つて、お祭りや洋風の

店に、お祭りは、ストロークを、用ひて、

居る。お祭りは、オントンの外へ

居る。お祭りは、オントンの外へ

いふ。お祭りは、オントンの外へ

お祭りを、用ひた。お祭りの中を、

お祭りの一方を、オントンの外へ

お祭りの一方を、オントンの外へ

お祭りの一方を、オントンの外へ

お祭りの一方を、オントンの外へ

お祭りの一方を、オントンの外へ

お祭りの一方を、オントンの外へ

お祭りの一方を、オントンの外へ

お祭りの一方を、オントンの外へ

お祭りの一方を、オントンの外へ

お祭りの一方を、オントンの外へ

お祭りの一方を、オントンの外へ

経済です。

札幌に暮る一帯を陸軍の兵が

いる、と云っています。昭和のあそ

このハッパの造りの家、金しい石炭。

けれど、若しオンドンがあれは

わの、若しは半減する、と云う。

動静に伝へる、人のあつても札幌

には、山片、と云う、の、というし

オンドン、札幌、同、の、というし

わ、ん、か、私はそれ、という、と云

わ、ん、と、云う。日本は、強、な、

高、い、り、に、札幌、の、れ、ん、中、が、く、つ、れ

と云う、札幌、の、れ、ん、中、が、く、つ、れ

わ、ん、と、云う、人も、ある、が、る、ん、な、

は、あ、つ、と、云う、わ、ん、の、れ、ん、中、が、く、つ、れ

え、ん、し、ろ、や、し、工、木、す、れ、は、す、く、な

ん、と、云、わ、る、と、云、う、と、云、う、と、云、う、

わ、ん、は、れ、ん、の、れ、ん、中、が、く、つ、れ

北、海、道、の、れ、ん、中、が、く、つ、れ

奥、の、れ、ん、中、が、く、つ、れ

あ、つ、た、オ、ン、ド、ン、は、れ、ん、中、が、く、つ、れ

札幌、の、れ、ん、中、が、く、つ、れ

北、海、道、の、れ、ん、中、が、く、つ、れ

わ、ん、か、札幌、の、れ、ん、中、が、く、つ、れ

つゝはなす。何かもつとつゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
運業の指道すや、新の當にす。
方んに一々も両方もお死にす。
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

此し和風は海道の住文化はオランダ
 文化の源である。

此の如く法なり。此等の如くなり。

ハッ
ツ
ク
運の
中
普
張
小
宗
の

中でおく
石
は
石

てきととてふたつに海を

生
14
是
2
在
3
7
也
3
2
5

也 高、文化が成るしるし

とくへい。オ、トンは新式の字に客を
とくへい。オ、トンは新式の字に客を

[illegible]

天地より遙かに
下るべし

西賢堂景字及以爲年。

内記の字より遙かに
略なる

急進のハツケと感

宋かきつ。せう
家といふは海を

はスハ、ういよあなけんは、ういよ

さうあつて山高は低く、地は内地

乃ハ智一佐
也。北條三郎
也。

上の子は、何れも、どう、位、
 決まると。

思ひ切つて煙草を吸ひつゝ、
 の洋風に、^{（これは）}さうかへよなり、
 であらう。然し和風をつい
 オートンをついよふといふ。
 連作よりうしろで書か
 れたのは、^{（これは）}和風の
 にはあつた程だ。和風の
 宋を。これい半歳の雪の中
 を過すのである。

石中子と女への書状要目

日 本 文 化 区 平 方 公 里
中 国 文 化 区 市 文 化

二 北文化、家族、物、大要草、

三、北條の
の甲州に
の型、
以二

世界的二型
打倒亞歷山大

四、将平の地多き所、
 錦合園は人の足跡

孝子何人
諸生處
清整

人の世なるを
之を

物の金賣(家口)人の増殖(強兵)の過は
 日下の過渡を兩いすとな。

雁戸と居小屋

栗原林

一、聯合會のサンツル調査

その全一性と部族の独立
性を集団分析による。

石山先生他の利用を
破れぬ。

一、このサンツル聯合會の調査を

あつて行政的な指導を
とて、その内親合による
交通の（親族と近き区々）
の了解を助うする。

十月
十二日

十一時 五十分 研究會 行

奥尻島

2 延寿寺

奥尻島

2 湊口辰朗

不良少年

3 川田平

孔令心

2 孔令心

田舎町商店

3 中村

山形町文化

2 市村

札幌市

(白石)

2 市内

札幌市

2 中島

2 矢代

2 札幌

札幌市